

日本の大学学生寮アーカイブズに関する一考察

— 京都大学の学生自治寮を中心に —

鈴木伸尚

【要 旨】

本稿では、大学の学生寮に関する記録史料（アーカイブズ）がどのように整理・保存・公開されているかについて、京都大学の学生自治寮を中心的な事例としてとりあげ、さらに、今後の学生寮関係資料の行方について大学のアーカイブズ機関をめぐる状況から考察した。

京都大学の学生寮はすべて寮の管理・運営に学生の自治会が携わる「自治寮」であるが、自治会が作成した記録（レコード）は必ずしも十分な保存管理状況にはない。ただし吉田寮自治会から京都大学文書館への移管や吉田寮生の有志による展示会（「今昔吉田寮展」）など、アーカイブズを志向する試みがないわけではない。

また「国立公文書館等」に指定された大学のアーカイブズ機関は2016年現在、14施設を数えるが、これらの機関での学生寮関係資料の収集・保存・公開状況には各大学ごとに差が大きい。機関・収集アーカイブズを十全ともたない大学における記録史料の散逸が危惧される。廃寮後の資料の一部は、同窓会組織が支えている現状である。

今後、大学のアイデンティティ、アカウンタビリティの観点から、つまり学生がどのように学び、感じ、生きたかを示す素材として、学生寮関係資料のアーカイブズ化が望まれる。

【目 次】

はじめに—課題設定—

1. 京都大学の学生寮アーカイブズの諸相

（1）熊野寮

（2）吉田寮

（3）室町寮

2. 学生寮関係資料と大学アーカイブズをめぐる

状況と諸問題

まとめにかえて

はじめに—課題設定—

大学の文化を語るうえで学生がどのように学び、感じ、生きたかを示す資料として学生寮に残された文書や物は欠かせない素材である。本稿では、日本の大学学生寮において諸々の「記録」(レコード)がどのような形で「記録史料」(アーカイブズ)として保存・整理・公開されているかを考察する入り口として、まず筆者が所属する京都大学の学生寮を取り上げる(第1節)。京都大学の学生寮(吉田寮・熊野寮・女子寮・室町寮・地塩寮)はすべて学生が寮の管理・運営に携わる「自治寮」である¹⁾。ここで学生自治寮に着目する理由は、学生の活動・生活記録が自治会という「組織」を担保として残されやすいとの仮説による。ただし紙幅の関係上、女子寮と地塩寮は、本稿では考察の対象から外している²⁾。

もっとも文部科学省の「学校基本調査」(2015年)によれば、日本の大学数は全体で779校(国立86校、公立89校、私立604校)ある。さらに日本学生支援機構による「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」(2014年)によれば、学生寮(寄宿舎)を設備として保持する大学は全体で82.4%(国立85.9%、公立81.8%、私立79.5%)にのぼる。したがって、ここで扱う事例は、大学学生寮アーカイブズという全体から見れば極めて限られた数でしかないことに留意されたい。

また、京都大学の学生寮は旧帝国大学から続く新制大学、国立大学法人、「国立公文書館等」に指定されたアーカイブズ(京都大学大学文書館)をもつ大学といった点に特徴づけられる³⁾。そこで、日本の大学アーカイブズとの関係から学生寮アーカイブズの諸問題について概観しながら、第1節の事例群を全体の枠組みと関連づけることにする(第2節)。

結論に先立って述べるならば、本稿に通底するのは、廃寮・閉寮による資料の散逸問題、とりわけ戦後に建てられた新制の国公立大学学生寮における散逸問題への危機意識である。

1. 京都大学の学生寮アーカイブズの諸相

(1) 熊野寮

京都大学熊野寮は、1965年4月に開設された京都大学の学生寄宿舎(鉄筋4階建×3棟)である⁴⁾。開設時は男子学部生のみ入寮が許可されていたが、現在は女子学生、大学院生、外国人留学生、聴講生など京都大学に学籍を置く学生すべてに門戸が開かれている。入寮者選考を

1) 地塩寮のみ京都大学YMCA(キリスト教青年会)が設置・運営主体である。

2) 地塩寮は国立大学法人京都大学が設立した施設ではないが、学生寮の記録史料の整理・保存について参考になる点が多く、ここに付記する。地塩寮は1913年に北米YMCAの寄付をもとに設立され、歴史の長さでいえば吉田寮と比肩する。また収容人数は最大で30名程度と多くないが、母体である京都大学YMCAには寮を出た後も継続して関わることが求められる。これまで開寮40年と100年の年に周年記念誌を作成し、特に百周年誌(京都大学キリスト教青年会百周年記念事業委員会記念誌部会編『地塩洛水—京都大学YMCA百年史』京都大学キリスト教青年会、2003年)作成時に、これまでの記録資料群が編年別に整理された。

3) 私立大学の学生寮を扱った論考としては、たとえば富田ゆり・丸山美季「学習院・目白清明寮の歴史的価値について」『学習院大学史料館紀要』第22号、2016年を参照されたい。

4) 京都大学「学生寄宿舎」紹介(<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/campus/habitation/dormitory.html>)を参照。

含む寮運営の過半を在寮生で構成する熊野寮自治会が実施している⁵⁾。

熊野寮が2015年4月に建寮50年を迎えるのを機に、記念誌の編纂が有志で計画され、実際の開寮日からは半年早い2014年11月29日に、『熊野寮五十周年記念誌』というタイトルで発刊された⁶⁾。熊野寮に関わるものとしては初めての周年記念誌であり、1965年建寮時から2014年に入寮した学生を含めた200人余りの執筆者と上下巻800頁の構成は、全国の大学学生寮が刊行した類書のなかでも質量ともに珍しい部類に入るだろう⁷⁾。

記念誌の巻末には熊野寮史（年表）が掲載されていて⁸⁾、その寮史執筆のための資料収集が筆者を含む編集委員の手によって行われた。具体的には、熊野寮内所蔵のものに留まらず、同窓会への呼びかけ、卒寮生への直接の依頼、吉田寮自治会への協力要請、また京都大学附属図書館や吉田南総合図書館、京都大学大学文書館、さらに寮の建設図面作成や建寮後の生活調査にかかわった故西山卯三氏（京都大学名誉教授）の記念室（「NPO法人 西山卯三記念すまい・まちづくり文庫」）を探查した⁹⁾。

資料収集の過程で明らかになった寮アーカイブズについての諸問題として、寮内に収められている自治会文書は、年度の半期ごとにファイルでまとめられているものの、保存状況が悪く紙質もよくないため、劣化が著しかった。にもかかわらず、電子式複写・デジタル化などの代替保存の処置はとられていなかった。また、2000年代はじめから文書の作成・保存が徐々にデジタル媒体へ移行していったが、その過程で資料の組織化や情報コントロールといった観点はほとんど展開されなかった。とくに自治会内部の資料作成を補助する資料委員会（2004年）や熊野寮HPを始めITを活用した情報発信を担当する情報部（2010年）が設立されたにもかかわらず、記録（レコード）の評価選別・保存・公開までのレコード・マネージメントを志向する議論がなされた痕跡を資料上は確認できなかった¹⁰⁾。そして、本格的な年史編纂の試みは初めてであったが、自治会構成員から機関アーカイブズだけでなく収集アーカイブズについて構想、実施する動きはなかった。以上三点から筆者は、アーカイブズを支える「記録遺産を未来へ」といった志向性は記念誌編纂当時、寮内にはなかったと考える¹¹⁾。

5) 熊野寮入寮選考委員会『熊野寮入寮パンフレット』（2016年）および「熊野寮Webサイト」（<http://www.kumano-ryo.com/>）を参照。

6) 企画当初（2013年10月）は、発案者で元寮生である筆者（2003年入寮）と中原耕（1995年入寮）の2人であったが、最終的には現役の寮生含め10人の編集委員を擁し、「熊野寮五十周年記念誌を発刊する会」という有志団体として発刊している。発刊に至る過程で熊野寮自治会と熊野寮同窓会が「協力団体」として名を連ねた。発刊日の2014年11月29日は、熊野寮同窓会（2007年設立）が主催する卒寮生と現寮生の懇親会である「同釜会」と同日である。

7) 同記念誌は寮生関係者にのみ販売しているため、2016年8月現在、一般には流通していない。『毎日新聞』（2015.1.10 地方版）と『サンデー毎日』（2015.2.15号）に紹介記事が掲載された。

8) 中原耕「年表」『熊野寮五十周年記念誌 下巻』熊野寮五十周年記念誌を発刊する会、2014年を参照。

9) 京都府木津川の積水ハウス総合住宅研究所内に位置する同文庫は、所蔵資料の検索システムを備えている(<http://www.n-bunko.org/syo2.htm>)。また1960年代後半に行われた熊野寮の生活調査については、西山卯三『日本のすまい3』勁草書房、1980年を参照。

10) 中原、前掲書を参照。

11) 京都大学の学生寮自治会は、大学の機関アーカイブズと異なり「情報公開法」や「公文書管理法」による法的制限を受けない。また福利厚生施設という学生寮の設置理由を鑑みれば、大学アーカイブズが志向する「建学の精神」の発見や「自校史」教育への活用を機械的に当てはめる必然性はない点には留意する必要がある。

(2) 吉田寮

京都大学吉田寮は、旧京都帝国大学時代から続く学生寄宿舎である。すでに100年を超える歴史をもつ¹²⁾。その歴史を紐解くには、京都大学がこれまで刊行した『京都帝国大学史』(1943年)や『京都大学七十年史』(1967年)、『京都大学百年史』(1997年)の他に、京都大学寄宿舎舎史編纂委員会による『京都帝国大学寄宿舎誌』(1986年)、京都大学創立九十周年記念協力出版委員会が編纂した『京大史記』(1988年)、それから京大吉田近衛寮文集編集発行委員会が編んだ『銀杏並木よ永遠に—京大吉田近衛寮の青春像』(1997年)、京都大学吉田寮卒寮五十年記念誌編集委員会編『紫匂う—京都大学吉田寮卒寮五十年記念誌』(2016年)などが寮関係者が執筆や編集に関わった有力な資料として存在する。ただし、これまで吉田寮自治会自らが年史編纂事業を行った形跡は熊野寮同様に確認されていない。

さて、資料保存あるいはアーカイブズについて考察するにあたって特筆すべきは「文化部情報局」および山本英司の仕事である。吉田寮自治会文化部情報局は1994年に580頁近くに及ぶ『「在寮期限」の到来からその終結へ—1985-90 吉田寮資料集—』を編纂するが¹³⁾、当時の情報局長であった山本は「編集後記」に「自治会関係の過去の資料がいくつかファイルに整理して収められていたほか、寮生が退寮する際に残していったであろう膨大な未整理の資料の山が堆く積まれていた」文化部室(旧委員会室)の状況を目にして「未整理の資料の山を見捨ててはおけなかった」という心情をいだき「これまでほとんど組織的活動がなされていなかったところ、一から組織を作るつもりで情報局の体制を整え、資料整理に邁進した」と記している¹⁴⁾。つまりここにおいて自治会の一部局である文化部情報局が、親機関である吉田寮自治会の作成した資料の調査・整理・保存に取り組み、その一部が上記の資料集としての「公開」につながったことが窺えるのである¹⁵⁾。

その整理・保存・公開事業の延長として、2000年以降の出来事の二つ、大学文書館への移管と自主展示会を位置づけたい。まず2008年1月17日に吉田寮自治会は、京都大学大学文書館へ総計1263点にもわたる資料の寄贈を行っている。この資料群には、設立年1913年から2000年代にかけて、執行部の活動方針・総括、寄宿舎規定、入寮案内といった寮運営の公的文書から、自治運営の中心を担った「総務」の日誌や吉田寮祭のパンフレットなど多彩にして充実した内容である。移管をうけた文書館は、同年度に「1900年代から1950年代の京都大学における寄宿舎に関する基礎的調査・研究—「吉田寮関係資料」を中心に—」を課題としたプロジェクトを立ち上げ、同年の総長裁量経費「教育研究改革改善プロジェクト等経費」の採択をうけ資料整理・目録作成を行い、2009年3月に『「吉田寮資料」解説・目録』が発刊されている¹⁶⁾。これ

12) 学生寄宿舎は京都帝国大学の創立間もない1897年に開設され、現棟は1913年に新築されたものである。戦後1953年に宇治寮(1965年廃寮)、1954年に女子寮が設置されたことでこれらと区別するために、今日までつづく「吉田寮」という呼称が正式なものとなる(京都大学大学文書館編『「吉田寮関係資料」解説・目録』、2009年を参照)。

13) ただし、刊行の主体は寮生の有志団体「資料集を公刊する会」である。

14) 山本英司「編集後記」吉田寮自治会文化部情報局編『「在寮期限」の到来からその終結へ—1985-90吉田寮資料集—』資料集を公刊する会、1994年を参照(<https://zaiki.github.io/p579.html>)。

15) 資料集は吉田寮自治会HPにて公開されている(<https://sites.google.com/site/yoshidadormitory/zaiki>)。

16) 京都大学大学文書館編『「吉田寮関係資料」解説・目録』は、文書館のHP上で公開されている(<http://>

らの資料群は、大学文書館の「所蔵資料検索システム」から検索可能であり、一般に利活用が開かれている¹⁷⁾。

また2011年には「今昔吉田寮展」が「やったね！吉田寮ほぼ100周年祭」（9月23日～10月2日）の企画の一つとして開催された¹⁸⁾。その際に先に移管した京大文書館から資料提供を受けていて、このような形で大学アーカイブズとの積極的な連携はアーカイブズの公開・普及活動という観点から興味深い。

この点をさらに「吉田寮補修特別委員会」という吉田寮生を中心とした有志団体が企画を下支えしている点から掘り下げたい。「吉田寮食堂を残そう実行委員会」が軸となってできた同団体は、吉田寮の居住棟（北寮、中寮、南寮）や管理舎、寮食堂の計測を行い、建築事務所に図面の立ち上げを依頼し、出来上がった図面をもとに寮の屋根瓦の痛みや共同使用部分における床・壁・天井・建具などのダメージ調査を行った。そしてこれらの調査結果は、その活動記録とともに適宜、ブログを通して公開されている¹⁹⁾。「今昔吉田寮展」はこうした補修特別委員会の活動の一環として企画されている。これらの活動からしたがって、記録史料（アーカイブズ）の収集・保存・公開が、情報が直接に記録された紙媒体だけに留まらず、それらの記録（レコード）が収容されていた建築物といったモノ資料の保全・公開活動と一体となって行われている姿が見えてくる。

ただし、以上のべた吉田寮自治会および有志のアーカイブズを巡る重層的な活動の根底には、「廃寮」を巡る自治会と大学当局との長年の緊張関係が横たわっていることを見逃してはならない²⁰⁾。

（3）室町寮

2016年1月4日・5日に京都大学の大学院生寮、室町寮に所蔵されている資料の現状調査を行った。京都大学室町寮は、かつて上京保健所であった木造2階建の建物（1942年建築）を1965年に大学院生用の寮として大学が買い取り提供している福利厚生施設である。大学キャンパスからは徒歩30分ほど離れた閑静な住宅街に位置する。室町寮は、大学院生・研究生専用の寮であること、キャンパスから遠いことに加えて、収容定員が19名ということもあって、吉田寮や熊野寮あるいは女子寮と比べてほとんど知られておらず、大学の年史で登場することも稀である。しかし、ここ50年ばかりの歳月を学生の自治を中心に寮運営をしてきたことから、それらの記録が一定程度残っている。また上述の二寮と異なり、開設20周年にあたる1985年に寮自治会が関わる形で『創立20周年 あゆみ』（紀書房）という小冊子を出している。

kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/siryou.html#siryou)。

- 17) 京都大学大学文書館「所蔵資料検索システム」を参照のこと (<http://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/bunshokan/page/main.html>)。
- 18) 「やったね！吉田寮ほぼ100周年祭」については、『京都新聞』（2011.09.30）と『京都大学新聞』（2011.10.01）に関連記事が出ているので参照されたい。
- 19) 詳しくは吉田寮補修特別委員会のブログ (<http://tabenokoc.blogspot.jp/>) を参照されたい。
- 20) 吉田寮補修特別委員会が呼びかけた署名（2012.5.21.）「吉田寮（寮舎および寮食堂）の補修・存続を実現するために」（<http://tabenokoc.blogspot.jp/search/label/署名>）を参照のこと。また京都大学より出された現棟からの新棟への移動を促す通知（2015.7.29）「吉田寮自治会への通知について」も参照されたい (http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/events_news/office/kyoiku-suishin-gakusei-shien/kosei/news/2015/150728_1.html)。



写真1 室町寮外観

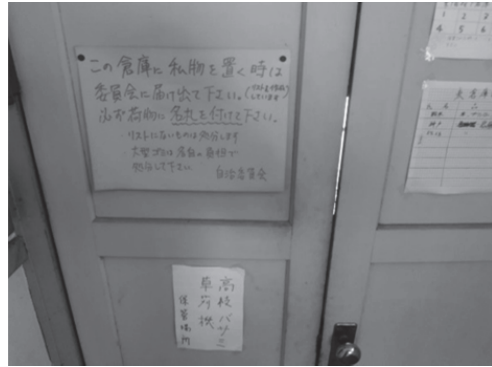


写真2 倉庫外観



写真3 倉庫内の収容状況



写真4 現状記録用の写真

現状調査の対象となったのは、2014年に音楽室の整理を行った際に鉄製のロッカーにしまわれていたファイル類である。これらは、ホコリ対策もかねて透明のビニール袋に包まれて倉庫に収容された。その数は5袋である。「原秩序の保存」を意識しながら、適宜デジタルカメラで写真を撮りながら記録をとった。アイテム数は総数で58あった。ただし、空き封筒やクリアファイルの1ページ、原稿用紙やカーボン用紙なども10点近く含んでいる。また、各ファイルに収まったピラを1枚1枚とりだして数えることはしなかったため、それらを厳密にした場合はアイテム数は100近くに及ぶと思われる。ファイルのほとんどには背の部分に内容を示す記述があり（「1981 1982 室町寮自治会記録」「'82後期委資」「全国寮」「'71～'83 温故知新 文書類 室町寮」等）、これらをもとに目録作成にあたっての構造分析と編成記述を考える必要があるが、今後の課題である²¹⁾。

2. 学生寮関係資料と大学アーカイブズをめぐる状況と諸問題

前節では、筆者が直接に関与した記念誌編纂を通して見えてきた京都大学熊野寮のアーカイ

21) 一部の資料については京都大学大学文書館への移管が寮自治会で検討されている。鈴木伸尚「京都大学大学文書館への「資料」移管について」（京都大学室町寮寮生大会資料、2016年）を参照。

ブズをめぐる不十分な状況や、吉田寮自治会および「吉田寮補修特別委員会」といった有志団体が大学文書館とも協力しながら記録史料の保存・活用を試みている姿、それから小規模ながら50年以上続いている室町寮での現地調査の様子を議論・報告した。しかし、これらはいずれも京都大学の学生自治寮であって、本節ではもう少し広く、全国の大学アーカイブズと学生寮関係資料をめぐる状況について概観しておきたい。

内閣府によれば公文書管理法で国や独立行政法人等から歴史公文書等（歴史資料として重要な公文書その他の文書）の移管を受ける施設である「国立公文書館等」に指定されているのは14施設である（2016年8月26日現在）²²⁾。そのうち大学文書館は、東京大学文書館、京都大学大学文書館、九州大学大学文書館、広島大学文書館、大阪大学アーカイブズ、名古屋大学大学文書資料室、神戸大学附属図書館大学文書史料室、東京工業大学博物館資史料館部門公文書室、東北大学学術資源研究公開センター史料館公文書室、東京外国語大学文書館の10施設である。これらの大学文書館は親機関である大学の歴史公文書等を扱う機関アーカイブズであるとともに、収集アーカイブズとして、法律上は他の独立行政法人（例えば近隣の地方国公立大学）からも文書の移管を受けることができる比較的大きなアーカイブズである。そこで、さしあたりこれらのアーカイブズにおける学生寮関係の資料状況を調べてみると、結果は必ずしも良好ではない。

表1 「国立公文書館等」指定施設における学生寮関係資料の有無（2016年8月26日現在）

施設名	学生寮関係資料の有無	備考
東北大学学術資源研究公開センター史料館公文書室	○	学務部を中心に多数保有
東京大学文書館	○	吉田元夫関係資料を受入 ²³⁾
東京工業大学博物館資史料館部門公文書室	×	目録一覧に該当なし
東京外国語大学文書館	—	目録検索システムは整備中
名古屋大学大学文書資料室	○	学務部・総務課文書にあり
京都大学大学文書館	○	吉田寮関係資料の目録あり
大阪大学アーカイブズ	△	作道洋太郎蔵書目録に1部
神戸大学附属図書館大学文書史料室	○	350点以上が整理済み
広島大学文書館	○	旧学生部移管文書にあり
九州大学大学文書館	×	目録一覧に該当なし

ここで資料が「なし」や「微量」となっている大学に寮がなかったわけではない。例えば九州大学には田島寮（2009年閉寮）が六本松キャンパスにあった。あるいは2018年度閉寮予定の松原寮がある。大阪大学が1973年に鴻池寮を廃寮にした際には学生側から大きな抵抗にあったため、多くの資料が残されていてしかるべきである。東京工業大学には現存する松風学舎（1966年開設）という男子学部・院生向けの寄宿舍がある。対して東京外国語大学にはかつて日新学

22) 「国立公文書館等の一覧」を参照（<http://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/about/kikan/kantou/kantou.html>）。

23) 「東京大学文書館活動報告（2015年2月～12月）」に「吉田元夫関係文書（駒場寮廃寮および三鷹国際学生宿舍関係文書）」の受け入れの記載がある（『東京大学史紀要』第34号、2016年、54頁）。

寮（1979年廃寮）があり、五味川純平や新美南吉などの著名人が在寮していた²⁴⁾。閉寮にした後も多くの大学は新しい寄宿舎を建てているので、これらの関係資料がもし移管されずに廃棄されているのであれば、学生文化を後世から省みる際の貴重な記録史料の問題として一考に値するのではないか。少なくとも筆者はそう考える。

他方で、学生寮アーカイブズの保存・整理に留まらず公開へと展開した大学文書館の積極的な活動例として、神戸大学附属図書館大学文書史料室が2011年に企画した神戸大学史・特別展「学生寮の青春譜—神戸大学史にみる寮文化—」（10月24日～11月4日）がある。戦前から現在に至る寮生活を写真をまじえての展示が好評で、その後再構成したパネル展という形式で神戸・東京の巡回展（神戸：2011年11月14日～25日及び東京：2012年2月6日～16日）にまで発展した²⁵⁾。ただしこの特別展を考えるにあたっては、以下のポスターの宣伝文にあるように、現行の神戸大学だけでなく「前身諸校」まで範囲を広げて構成していることに注意を払い²⁶⁾。

豪放自由闊達な寮自治、深夜の集団馬鹿騒ぎストーム、放歌高吟する寮歌、隠れ自炊エッセン、趣向を凝らした寮祭…。学生寮がはぐくんだ多様な“寮文化”の中で、神戸大学及び前身諸校の学生たちは、どのような寮生活を謳歌したのでしょうか。住吉寮の個室化改修及び国維寮の再開を記念して、現在の5つの学生寮のほか、閉寮された多数の旧寮も含め、戦前から現在に至るまでの神大生の寮生活を貴重な実物や写真などで紹介します。

つまり前身諸校としての旧制姫路高等学校の白陵寮、神戸商船大学予科の思誠寮はそれぞれ制度史上は今日の神戸大学に包括されているに違いないが、記録史料の保管に関しては、旧制高校の校地はその後兵庫県立大学へ譲渡され（その本館に旧制姫路高校同窓会資料室がある）、神戸商船大学のものは神戸大学海事博物館へ収められているなど、分散していることに気づかされる。したがって、このことを前向きに捉え、大学アーカイブズの構築に際して年史編纂が一つのきっかけとなったように、大学学生寮アーカイブズの構築に関して、文書館による展示企画展が記録史料の所在確認調査につながるかもしれない。

また大学の文書館を離れて学生寮アーカイブズに関する資料保存の取り組みを見るならば、たとえば九州大学の六本松・箱崎キャンパスの移転にともなって設立された学生の有志団体「箱崎九大記憶保存会」が、2008年最後の田島寮寮祭の名物行事「樽神輿」の様子を映像・写真に収めインターネット上に公開している²⁷⁾。あるいは東京大学の駒場寮の同窓会が、廃寮後8年経った2009年からの準備を経て2010年から活動を始め、「保管されている資料を基にした資料

24) 東京外国語大学日新学寮同窓会が「東京外語日新寮アーカイブズ」を作成し2013年に完成披露している（<http://gaigokai.or.jp/information.html?id=224>）。

25) 神戸大学史・特別展「学生寮の青春譜—神戸大学史にみる寮文化—」（http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/event/e2011_10_24_01.html）および神戸大学史・巡回展（神戸）「学生寮の青春譜—神戸大学史にみる寮文化—」パネル展（http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/event/e2011_11_14_01.html）を参照されたい。

26) 同特別展ポスター（http://www.kobe-u.ac.jp/documents/event/e2011_10_24_01-1.pdf）を参照。

27) 箱崎九大記憶保存会HP（http://hakozaiki-kyudai.com/c3_campus/c3_event_01.html）を参照。

集の編纂および書籍の発行」が目指されている²⁸⁾。いずれにせよ、こうした民間での収集・保存の取り組みは寮の同窓会を母体としたものが多いが、今後これらの活動と大学のアーカイブズ機関がどのように協力的な関係を結べるかはひとつの課題としてあげられる²⁹⁾。

その上で、そもそものところ散逸を免れているケースはきわめて稀少で、機関・収集アーカイブズ（あるいはアーカイブズの機能をもった部署）を十全ともたない多くの日本の大学において、かりに閉寮になった学生寮関係の記録史料は、親機関である大学の組織アーカイブズに位置付けられることなく廃棄されるか、あるいは熱心な出身寮生の手で偶然に一部が保存されているかのいずれかであろう。とくに筆者は、戦後に建てられた多くの学生寮が改修・建替えが進む中で、それらの記録史料が散逸していく可能性を危惧している。

こうした散逸の危険性についてはすでに菅真城（大阪大学アーカイブズ専任教員）が公文書管理法の施行に対して「国立公文書館等」の指定を受けることの困難さの文脈で明確に指摘している。国立大学法人が理想的には非現用法人文書の移管を受けることの意義は認識していても、現実的には施設面での国の高い要求水準に答えられず、さらには保存期間が満了した法人文書をすべて廃棄しても法令の違反にはならない³⁰⁾。法人文書の廃棄・保存延長の判断はひとえに原局（文書作成者）にかかっている現状である。これは同法の対象外である私立大学でも事態は同様である。一般に学生寮関係の記録史料は「組織文書（非公的機関資料）」³¹⁾にもかかわらず機関アーカイブズの対象になりにくく、収集アーカイブズの観点から所在確認調査、概要調査・現状記録、内容調査が適切な受け入れ先とともに求められるが、果たして担い手は誰になるか、どの組織になるかが大きな課題としてある。

本節では山積する課題を提示することに終始したが、最後に学生寮アーカイブズの意義を論じることでもって本稿全体を閉じることとする。

まとめにかえて

本稿では、大学の学生寮に関する記録史料がどのように整理、保存、公開されているのかについて京都大学の学生自治寮を中心に考察してきた。理想的には学生寮に自治会がある場合はそこに、なければあるいは寮自体がなくなれば大学のアーカイブズ機関が受け皿になることを想定しつつも、「国立公文書館等」の指定を受けている施設、あるいは公文書管理法そのものの規定から現実には十分に機能していない現状を描いてきた。

今日、日本の大学アーカイブズの世界が広がりつつあることはおそらく間違いない³²⁾。その目的については、しばしばアカウンタビリティとアイデンティティの二つの観点から論じられ

28) 駒場寮同窓会WEB (<http://www.komaryo.org/>) を参照。

29) 旧制高校時から連続している学生寮に関しては松本市にある「旧制高等学校記念館」が包括的な収集アーカイブズとして機能する可能性がある。

30) 菅真城『大学アーカイブズの世界』大阪大学出版会、2013年の第7・8章を参照。

31) 神谷智「大学アーカイヴにおける資料の収集・整理・保存・公開について」『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005年所収の「大学アーカイヴズが収集する資料についての概念図」を参照。

32) 全国大学資料協議会の機関会員は、東日本部会67（2015年10月5日現在）、西日本部会38（2015年1月9日現在）を数える。

る。つまり、情報公開法施行(2001年)にともなう大学の社会的な説明責任・能力(アカウントビリティ)の必要性和「自校史」教育に見られる大学の自己同一性(アイデンティティ)の希求である。

「はじめに」で述べたように学生寮の記録資料は、大学の文化を語るうえで、とくに学生がどのように学び、感じ、生きたかを示す有効な素材となりうる。そしてそのような場を大学が公的な機関としていかに保障してきたかを示すことにもつながるだろう。それは自校の大学史編纂のためといった狭い意味に留まらず、現在進行形で大学の活動を説明し、さらにその大学に身を置く学生が大学の多様な有り様に触れる機会に寄与するに違いない³³⁾。今後、学生寮関係資料のアーカイブズ化が関係者、関係諸機関の積極的な働きによって望まれる所以である。

謝 辞

本稿は、平成27年度アーカイブズ・カレッジ(短期コース)修了論文「日本の大学学生寮アーカイブズに関する考察—京都大学の学生自治寮を中心に—」に大幅な加筆・修正を加えたものである。原論文の執筆には、講師スタッフの方々の情熱と三重の地でともに学んだ同期履習者からの刺激なくしては成り立ち得なかった。そして本稿の投稿については、国文学研究資料館の太田尚宏氏、同管理部学術情報課企画広報係の小西理子氏、紀要関係者のご助力なくしては実現し得なかった。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

33) 近年の大学学生寮へ積極的評価については、望月由起「学生寮の機能多様化と大学のストラテジー」『カレッジマネジメント』183号、リクルート進学総研、2013年を参照されたい(http://shingakusouken.lekumo.biz/college_m/2013/11/18314-e1d5.html)。また、「学生および卒業生の活動に関する資料」の重要性を主張するものとして、オーラルヒストリーによる組織的な収集を提唱する新沼久実氏の論考「大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリー収集手法—聖路加看護大学の事例からの考察」『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第10号、国文学研究資料館、2014年を参照されたい。